

風の詩

ヒアシンズハウスの会資料



第13号目次

- (1) 「浦和学」の扉を開くヒアシンズハウス（山中知彦）
- (2)(3) ヒアシンズハウス ― 美しい風景とともに（小坂真周）
- (3) 今なぜ立原道造か（野口久枝）／(4) 愛される立原道造（清水美緒）・会計報告・編集後記

「浦和学」の扉を開くヒアシンズハウス

山中 知彦

「ないものねだりから、あるものさがしへ」という標語とともに「地元学」という概念を意識し始めたのは、十二・三年前に担当科目「地域政策」の教材として取り上げた時からだと思う。水俣病によって地元への誇りをズタズタにされた市民たちが、再び地域の環境の連鎖に着目し、地元への愛着探しを始める地域研究活動を「水俣学」と呼んだ。そして成果を挙げた「水俣学」を地域おこしの方法として一般化したネーミングが「地元学」の出発点だと言われている。

全国津々浦々に〇〇銀座がつくられた経済成長期、経済的な豊かさを目指して地方から東京に人が集まった中に、私の両親もいた。都内の貸家から通勤圏の蔵に持ち家を取得し、学齢に達した長男の私は電車通学で十二年間浦和に通うこととなった。そして小学校の写生大会や中学の野球部のランニングで別所沼はなじみの場所となった。そういつたわけでは私の地元帰属意識は蔵よりも浦和の方が強くなり、結婚以来浦和で引越しを重ね、自営の設計事務所も自宅近くに置いてきた。しかし、埼玉県庁や浦和市役所へさいたま市役所の仕事もしたものの、遠隔地の仕事で朝から晩まで働き詰めで、地元のあるものさがしなどとは無縁の生活を送っていた。

中学と事務所経営の先輩である永峰さんに誘われ、ヒアシンズハウスをつくる会の発起人になったちようど

その頃、事務所に入ってきたマニアックな浦和レッズファンでもある新入社員の新入社員が中山道浦和宿の街路の変遷をテーマにしたもので、私が小中学校時代に道草をしながら帰った細街路が江戸時代から続く道であることを知り、ヒアシンズハウスの会の活動で知ることになった浦和絵描きや小中学校の校歌の作詞者として名前だけ知っていた詩人の世界なども相まって、四十年代後半にして浦和のあるものさがしに開眼した。当時、まだ浦和駅鉄道高架化事業は長い長い計画段階にあり、全国唯一急行の停まらない県庁所在都市として押揃えられていた中、浦和レッズが全リーグ有数のサポーターを集めたのと同様、ヒアシンズハウスも、立原道造ファンの支えとともに、一方では地元住民のあるものさがしの雪の結晶の核になったのだと思う。

コロナ禍の緊急事態宣言中、かみさんと家の周りを散歩した。もう十分に熟知していると思っていた浦和のまちなも改めて歩いてみると、初めて歩く道筋に古くからありそうな屋敷林に出会ったり、ブラタモリではないけれど微妙な高低差にまちの履歴を感じたり、まだまだささやかな発見の喜びがあるものだと感じた。そして今になってヒアシンズハウスが私自身の地元学の扉であった

のだと気付いた。

後づけで言えば「地元学」の先達として、「北越雪譜」や「秋山記行」で越後の民俗を江戸に伝えた鈴木牧之、生まれ故郷安田町の史料研究から出発して日本全土の「郷土」を集大成した「大日本地名辞書」を編さんした吉田東吾、戦前に諏訪の中学教師として数々の郷土地理研究を行って現在再評価されている三沢勝衛たちも挙げられる。また「地元学」にも諸相があり、柳田國男の「遠野物語」や私淑する民俗学者・赤坂憲雄が提唱した「東北学」など民俗学系や、足尾鉍毒事件の舞台を巡る「谷中学」といった社会学系、そして長寿人気番組となった「ブラタモリ」などエンターテインメント系まで様々だ。そして経済成長時代から人口減少時代に移る頃から、全国に様々な地元学が生まれ、ご当地検定や観光ボランティアガイドなどへも展開している。

ヒアシンズハウスが扉を開いてくれる「浦和学」があるとすれば、文学・都市・建築・美術等々のクロスオーバー系と言えるのかもしれない。さらに別所沼の水質保全活動などと連携すれば、自然科学系も派生するのもかもしれない。ハウスガイドの励みにもなるかもしれないし、私自身の現役引退後にささやかな浦和学徒の途を歩むもの面白いかもしれない。

（やまなか・ともひこ 新潟県立大学教授）

ヒアシンスハウス ― 美しい風景とともに

小坂 真周

それは 花にへりどられた 高原の
林のなかの草地であった

私の好きな詩、「草に寝て……」の書き出した。立原道造が信州の高原で作った詩と思われるが、さいたま市南区の別所沼畔に建つヒアシンスハウス周辺の風景が詩と重なる。

別所沼公園の南側の花壇のある歩道に立って北の方角を見る。花壇には、マリーゴールドやサルビア、日々草の花が色とりどりに咲いている。その先に青々とした広い草地があり、その向こうに片流れ屋根の小さな木造住宅が建っている。木々の緑が、その小住宅を包むようだ。詩の題には「六月の或る日曜日」と添えてある。

私は岩槻区に住んでいるが、時々、別所沼公園に行くことがある。今年は六月十九日、久しぶりに行った。夜、浦和で会合があるため、その前に寄ってみようと思ったのである。その日は雨が降ったり止んだりの天気で、六時過ぎ駐車場に着いて車を降りると、もう薄暗かった。歩いてまずヒアシンスハウスに向かう。歩道の先に別所沼が見えると、にわかにながら心晴れた。

今年の五月十日、蓮田市の東部に畑を借りることになった。蓮田には黒浜沼という自然の沼がある。楕円のような形で、広さは地図上では別所沼と同じくらいに見える。周りには葎が生い茂り、郭公の鳴き声が対岸の林の中から聞こえてくる。そんな昔のまま沼が今も残っている。別所沼も道造が訪れた昭和の十年代はこんなだったのだらう。借りた畑は黒浜沼から北へ千二百メートルほど行ったところにある。

畑と書いたが、古い空家の前の庭と言った方がよいか

もしれない。四辺形で広さもヒアシンスハウス前の草地と同じくらいだ。道造は週末住宅としてヒアシンスハウスを考え、その外観や間取りをスケッチに残している。

私は平屋の軒下から前庭にかけて借りることにした。庭を作ろうと考えたのである。庭の風景として思い浮かんだのが「草に寝て……」の世界だった。

南側の庭に面してコンクリートのテラスがある。上は半透明の波板が張られているので雨除けには十分だ。言わば物干しの空間が私にとつてのハウスになる。持ってきた折り畳み椅子を開いて座わり庭を眺める。中央は黄色い小さな花をつけたカタバミに覆われている。左手にはポピーと思われる赤い花が咲いていた。右手には丈の高い草花が、青紫や黄色い花を咲かせている。一列の葱坊主と小さな葉を付けた里芋の一群が元々畑だったことを物語っていた。

庭の南側は低い生け垣が横に連なっている。そして何よりも嬉しかったのは生け垣の向こうもずっと畑が続き、遠くの木立や竹林が見えることだった。空がどこまでも広がっていた。高原の別荘地、そんなふうに見えるが、すぐに現実に戻る。一面に草々が伸びかけている広い庭。これからスコップ一本で切り開いていかねばならないと心に決め草の海に飛び込んでいった。

道造との出会いは約十五年前。新聞の記事で知り、建つて間もないヒアシンスハウスを訪ねた時だった。奥のベッドの辺りにあった道造の写真と対面し親しみを感ずる。東大の近くににあった立原道造記念館も訪ねたことがある。記念館は訪ねて二カ月後くらいに閉館している。軽井沢高原文庫に行ったのもだいぶ前のことだ。自筆の「のちのおもひに」が刻まれた詩碑があった。製図板を模した碑面を、一匹の小さなカミキリムシが渡っていた

たのを覚えていた。

五月は週二回ほど庭に行き、借りた道具を使って土を掘り返し掘り返し、何とか除草は目処が立った。初めに、自宅にあった草花の鉢を一つ持っていて植えた。それは夏の後半、ニッコウキスゲのような花を咲かせるはずだ。五月下旬には開花少し前の紫陽花を一鉢持っていた。両方とも何とか根付き、六月、紫陽花は薄いピンクがかつた花を咲かせた。

作業の合間に椅子に腰を下ろし、一面掘り返した土だらけの庭を眺める。雨の日が続いた後の良く晴れた日の午後、でこぼこの土の上の方だけが乾いて白くなっている。ふと、道造の「のちのおもひに」の一節が思い浮かんだ。

―そして私は

見て来たものを 島々を 波を 岬を 日光月光を
だれもきいてゐないと知りながら 語りつづけた……
目の前の土のうねりが海の波に見えたのである。

そして六月十九日、庭作りのヒントを得るためにヒアシンスハウスに来たのだった。左手でドアノブをつかむ。当然、見学の日ではなくドアは開かない。ところがドアのガラス越しに中を覗くと奥の方に人影があった。「あつ」と思った。が、それは私の影が向こうのカーテンに映っているのだ。私の後方から公園灯の光が差し、帽子を被った私の頭と肩の輪郭が投影されているのだった。

七月、椅子に座わり庭を眺める。木製のラティスを自分の前と横に置いたので別荘にいるような気分になった。次はでこぼこの土を均そう、別所沼の穏やかな水面のように。作りかけた庭を眺めながら、あれこれ思いを巡らすのは楽しいものである。

一昨年の十二月三日午後四時頃、私は別所沼にいた。ヒ

アシンスハウスのドアノブはもう冷たかった。沼の西側の道を北に向かつて歩いていった。メタセコイアなどの紅葉が水面に映り美しかった。私の先を母子らしい二人が歩いていった。あつ、虹だ」と男の子がよく通る声で言った。私も立ち止まって空を見上げた。紅葉した木々の空に虹が架かっていた。私は急いで引き返した。そしてヒアシンスハウスと、その向こうに立ち上る虹の写真を撮ることができたのである。

幸福なことに、私はヒアシンスハウスの前の空間に似た庭と向き合っている。道造の詩、夏の高原、別所沼……、雨除けだけの仮のハウスは、それらの世界と続いている。小鳥らのたのしい唄をくりかへす 美しい声（草に寝て）が今、私の耳にも聞こえている。

(二)さか・しんしゅう 芸術作家

*

今なぜ 立原道造か

野口 久枝

十九世紀フランスの詩人、シャルル・ボードレールが書いた散文詩集「パリの憂鬱」の中の「港」の翻訳を、「波止場」という表題は立原道造している。その言葉の配列からくるイメージは、絵画的であり、色彩まで想像される詩篇であった。

波止場

波止場こそ、人生の戦いに疲れはてた人には、すばらしい住居である。ひろびろとした空、雲の建築、絶えず変はる海の色、燈台の瞬き。これらすべては、眼を楽しませるに不思議な程似つかはしいリズムである。複雑な艱装をされて、船の形はすらりとしている。波濤はその船をゆらりゆらりと揺すぶるのである。そのおかげで、人は、リ

ズムと美の趣味を心のなかに植えつけられる。そして、更に、港には到る所、一種神秘めかしい貴族的な快楽がある。といふのは、もう好奇心も野心もないやうな人が、物見台に横になるか、防波堤に肘をつくかして、別れをする人、戻ってくる人、まだ何か欲しがることとも出来、旅行したかったり金持ちになりたかったりする人たちの、さまざまな動作を眺めることである。

ボードレールの死後にまとめられた「パリの憂鬱」は、散文詩というジャンルを文学として確立した。ベルレーヌ、ランボー、マラルメ、バレリーらによつてボードレールの名声は二十世紀に入って世界的になり、日本でも明治時代に早くも紹介され、上田敏の訳がある。蒲原有明、永井荷風、萩原朔太郎、西脇順三郎らにボードレールの影響が見られる。

若くして四季同人に迎えられていた立原道造は、四季先人の萩原朔太郎がボードレールの作品を賞賛していること、幼少時には日本橋浜町の港湾風景を見て育っていること、珊瑚の北限にある内房総の那古の浦の海水浴で、海の色がグラデーションを見ていること、ボードレールが十六才、立原道造十五才にして天文学を志していたことの共通点は、その感覚の同一性から、立原道造はこの散文詩の翻訳をこころみただけではないか。

1798年から1863年までの生涯にあり、貴族出身のシャルル・ボードレールは、ドラクロワを賛美し、7月王政が終る1848年の労働者革命の際、銃を手に叛徒側に立ったというエピソードもある。51年のナポレオン3世によるクーデターおよび第二帝政期には政治熱も薄れ詩編、エッセー、A・E・ポーの翻訳を手が

けている。

1914年生まれの立原道造は、中学生の時に日本へやってきたアインシュタインの講演を聴いた。この時、彼は相対性理論を知るのである。当時の絶対的思考と、彼が九才の時にあった関東大震災以後の社会の閉塞感、震災恐慌にもめげず、焼け跡に以前より大きなビルを建てて家業の復興をした両親のもとにあり、東京大学工学部建築学科で建築を学んでいる。

建築と文学のジャンルの両立は、一見、大きすぎる活動に思われるが、詩、散文詩、いくつかの翻訳、東大新聞からの掲載原稿の依頼、芥川龍之介の著作をまとめるという出版社からの仕事の依頼などを受けた立原道造の才能は、それを可能としていた。

建築の仕事は東京駅改築、横須賀セント・ヨゼフ病院を建てるなど、多数の人たちとコラボレーションをしてきたが、風邪をこじらせて肋膜炎を患った立原道造は、軽井沢に近い追分で二ヶ月の療養後、自宅へ戻る。1930年不意に訪れた徴兵検査で丁種不合格の烙印を押されている。それから、彼が二十四才と八ヶ月に長野県で遭遇した人為による内蔵破裂と吐血という痛ましい死は、両親、家族、親族、友人たちの悲痛でやりきれない思いと、数多く残された作品、彼の清らかな魂の軌跡は、人々の心を捉える。

子供たちからおとなまで、生命政治、生命哲学を希求される現代の諸状況、いまだかつて経験のない気候変動や、地球全体の環境の異常な変化の只中において、国家経済を言い、はじめようとしている戦争を忌避しているからである。

(のぐち・ひさえ 住宅ジャーナリスト)

愛される立原道造

清水 美緒

外出自粛明け最初の当番の日は、朝から大雨だった。前庭の花壇は夏の花に変わり、木箱のようなハウスは北側の大きくなりすぎた木に包み込まれるようだ。

窓を全開にし電灯を灯して来室者を待つが、さすがに今日はジョギングの人さえいない。

「今日は暇だねえ」と公園の警備のおじさんが声をかけてくださった。

ハウスガイドを始めて1年になる。「天声人語」に惹かれてハウスを訪れたのが昨年3月。なんて素敵な空間、こんな部屋で一日過ごせたらと、無謀にもハウスガイドに加えていただいた。だがしかし、困った。立原道造について何も知らないのだ。

最初はハウスを訪れるお客様が先生だった。教えていただいた「信濃追分文学譜」を皮切りに図書館で関連本を借りまくり、軽井沢にも出かけた。ちょうど昨年は没後80年に当たり、軽井沢高原文庫では「立原道造を中心に」という特別展示が組まれていたし、大賀ホールでは「立原道造の浅間山麓」と題する日本ペンクラブ企画の映像ライブ・座談会・朗読が催され会場は熱気に包まれていた。

没後80年もたつてなお続くこの人気はいったい何なのだろう。疑問をもちつつ、その短い人生の軌跡を知り、関わった人々の言葉を読むにつれ、才能に溢れ純粹なまま夭折したこの若者の愛すべき人となり浮かび上がってきた。

自分の油屋の主人の回想では、村の子供たちは道造が

大好きで細長い身体にじやれついて遊んだというし、まだ高校生だった加藤周一は、たまたま連れ立って歩いた道すがら卒業設計について雄弁に語る道造の考えの明晰さに感心し、その人柄に飾らない魅力があると思ったと「羊の歌」に書いている。

一方で年上の深沢紅子には、死の床での散髪に立ち会ってほしいと頼むなど、甘えた一面を見せて、死後、母親は「道造はどうしてあんなにあなたにあまえたでしょう」と泣いた。

その母親に「淋しいので話し相手になってほしい」と頼まれた水戸部アサイは葬儀の後、立原家に二か月滞在したという。その間、母と婚約者の間でどんな会話が交わされただろう。

そして恩師堀辰雄だ。盛岡から決別ともいうべき道造の手紙を受け取った際に堀辰雄がどう感じたかは解らないが、道造を追悼する「木の十字架」や「雪の上の足跡」には慈しみが溢れていて感動的だ。

同級生の小場晴夫が晩年に「彼との交流が青年時代を忘れ得ぬ時間としてくれ、その想い出、そして、その実りが現在まで続いている」と語っているように、その人間の魅力が、多くの人々から愛され、記憶され、今日まで続く人気を色褪せないものになっているのだろう。

このハウスにもその魅力が存分に引き継がれているに違いない。明るさと淋しさを併せ持ち、誰もが居心地がいいと感じられる空間。ほの暗いベッド脇の道造の写真が少しはにかみながら微笑んでいるように見えた。

(しみず・みお ハウスガイドボランティア)

「ヒアシンスハウスの会」第十五期 会計報告

◎会員数 (二〇二〇・七・三一現在) 九十名

第十五期会計年度「会費有効期間」

二〇一九・八・一「二〇・二」

二〇二〇・六・三〇「八・三一」(二一ヶ月)

＜収入の部＞

前期繰越金 二、七七七、八〇一円

会費収入 四二二、五〇〇円

さいたま市文化助成 五五、〇〇〇円

雑収入(絵葉書売上他) 一八、九九七円

収入計 三、二六四、二九八円

＜支出の部＞

夢まつり 一三四、八七〇円

印刷費 二八、六四六円

送付関係費 一五、六四四円

ハウスガイド日当(一、〇〇〇円×二三八日)

火災保険料 一〇八、〇〇〇円

雑支出 一一、三三〇円

支出計 三九四、四〇八円

収支合計 二、八六九、八九〇円

次期繰越金 二、八六九、八九〇円

※第十六期会計年度「会費有効期間」

二〇二〇・七・一「九・一」

二〇二一・六・三〇「八・三一」(二一ヶ月)

(会計担当 佐野哲史)

風の詩「ヒアシンスハウス夢まつり」資料 第十三号 定価一〇〇円
発行日 二〇二〇年一〇月一日 / 発行人 北原立木(会長) 〒三三六〇〇〇
二一 埼玉県さいたま市南区別所五―五九 電話 〇四八(八六三)四四七四
ホームページ <http://haus-hyazinth.hp.infoseek.co.jp>